

会報

教育問題あれこれ

会長 原卓也



原卓也会長

秋に入って教育関係のニュースが新聞でいくつか注意をひきつけた。

「問題教師」教室からなくせ というかなり大きな見出しが、元教師のわたしをきよっとさせたのは九月早々の「読売」だった。文部省が全国の都道府県教育委員会に、授業の教員を教壇にそのまま立ちつづけさせぬようにする対応策を考えてもらうことを要請したという。たしかに、これは困ったものだど頭をかかざるを得ないような教師に出くわすことはめずらしくない

から、この要請はもつともである。むしろやつと今頃、といった感すらある。ただし、この「問題教師」なるレッテルを、だれが、どのように貼るか、それがむずかしい「問題」でもある。へたをする、とんだ方向に流れてゆきかねないからだ。

高校入試がここに来て大がかりな見直しを迫られているらしい。中教審(中央教育審議会。文部省の諮問機関)は文部省に対して高校入試に最低線を設けず、全入を認めるよう提言する方針を固めたという。現在の入試では多くの高校は、一定のレベルを保つため、定員割れしても足切りをしている。これをやめて定員いっぱい入学させるべきだという提言である。

また東京都教育庁が九月七日に行なった発表によると、「チャレンジ・スクール」とよばれる全国初の新しいタイプの定時制高校を、来年度からスタートさせることに決めたらしい。この高校では、入学のための学科試験も行なわなければならない、内申書の提示も求めず、志願者の熱意を最も重要とみなして、面接などを中心に選抜を行なうのだそうだ。

こうしたニュースからみると、これまで高校の入試は、希望する高校での教育を受けるのに十分な能力と資質を判定する「適格人物主義」であったのが、しだいに各高校の特色に配慮しながら一任する方向に変ってきたと言えそうだ。高校進学率が九十七パーセントにのぼり、「高校は事実上すべての国民が学べる教育機関」という位置づけになったとされる現在、方向そのものは歓迎すべきものかもしれない。

国立大学を独立法人化しようという検討がはじめられている。外語大でも議論されていることと思う。独立法人となった各大学には中期目標が定められ、三年から五年の間にそれを実施して「評価委員会」に判定をゆだねることになるだろう。今回の概算要求にあげられている「大学改革」の項目では、まさしくその二億六千五百万という巨額の金が、国立大学の教育研究活動を評価する「大学評価・学位授与機構」(仮称)の新設に当てられることになっている。これはきわめて危険な発想ではないか。この新しい「機構」によって大学の活動が評価され、その判定にしたがって予算の配分まで動かされることにもなったら、独立法人化にあらゆる方策を考えざるを得なくなるからだ。そうなったら、教育や研究の自由さえ制約されることになりかねない。崩壊した旧ソ連邦の大学やアカデミーの実状がどうであったか、思い起してみればよいだろう。(昭28卒・前東京外国語大学長)

今年度のロシア語劇「長男」大学講堂で11月22日(月)6時

卓也

〒114-8580
東京都西ヶ原4-51-21
東京外国語大学内
東京外語ロシア会
電話 03-3917-6111(代)
振替口座 00110-8-22338

ロシア会
総会と懇親会のお知らせ
日時 十一月二十日(土)
総会 午後一時半
懇親会 午後四時半~七時
二時二十分
懇親会の内容
「プーシキン二百年祭
にちなんで」
V・ソローキン
(作家・本学客員教授)
ソローキン先生については次頁の「西ヶ原だより」に詳しいご紹介の記事があります。

懇談
会場 東京外国語大学
西ヶ原キャンパス
総会は四号館六階中会議室
懇親会は四号館六階大会議室
会費 六千円(学生無料)
総会後、懇親会まで時間が
ありますが、当日は語劇など
外語祭の催しがあり、模擬店
なども出ていますのでお楽し
み下さい。

西ヶ原だより

渡辺 雅司

百周年記念行事と外語祭

すでに皆さんご承知のように、今年が本学が東京高等商業学校から独立して百年目にあたります。これを記念して、11月4日から記念式典をはじめとして、コンサート、国際シンポジウム、名誉博士号授与式等々さまざまな行事が組まれていきます。そしてこうした記念事業のしめくりとして、西ヶ原キャンパスで最後の外語祭が催され、その開催中にロシア会の総会ならびに懇親会が開かれます。古い同窓生には想像もできないかも知れませんが、外語祭の盛り上がりは、全国の大学祭でも最上位にランクされています。もちろん昔どおりに語劇も行われていきますので、是非この機会に懐かしい母校を訪れて頂きたいものです。

報告されていますので重複は避けませんが、移転した暁には従来のような、教室を改造してのユニークな料理店は開けなくなりそうです。今の外語大生のエネルギーが良くも悪くも発揮される最後の外語祭を味わって頂きたいのです。これはつい最近まで学生委員長をしていた私のお願ひでもありません。というわけで、最後の「西ヶ原だより」をお届けします。

今年のビッグニュース

それはなんといっても客員教授として、目下ロシアでもっとも注目されている新進作家ウラジーミル・ソロキンが亀山教授の斡旋で、一年契約で着任したことでしよう。従来のロシア文学の殻を破った実験的な作品を次々と発表しているソロキンは今年西武、海外でも広く紹介されており、長編「ロマン」(望月哲男訳)短編「愛」(亀山郁夫訳)が国書刊行会から翻訳出版されています。ロシア・アヴァンギャルドの流れをくむ彼は、初め画家として出発、いまでは芝居や映画も手掛けるという多彩な才能の持ち主です。すでにドイツで客員教授の経験があるとはいえ、初級会話

も担当しなければならぬ外語の事情から、一抹の不安はありました。最初に外語の学生の印象を尋ねたとき、「大きなエネルギーを貰って、このたぎが即座に返ってきたので、これは本物だと私自身胸を撫で下ろしました。一八七センチの長身で長髪をなびかせたジーンズ姿は、一見ロック歌手のようですが、その天使を思わせる容貌と優しい語り口は、学生(とりわけ女子学生)の人気の的です。文学の授業では、得意の絵を駆使してプーシキン、ゴリ以来のロシア文学の流れを学生に平易に解説してくれています。これ聞いて私ばかりで外語、早稲田で講師として多くのロシア研究者を育てたプノワさんのことを思い出し、彼女の伝記を彼にプレゼントしました。百開は一見に如かず、作家ソロキンの素顔をご覧になりたい方は、ロシア会に出席され、彼の講演を聴かれることをおススメします。外語がこれまで多くの作家を輩出してきたことは周知のところですが、この現役の作家の感化を受けて、文学を目指す学生が出ることを期待します。

氏とともに、昨年度の木村彰一賞を争ったことも嬉しいニュースでした。亀山氏は本来の専門であるロシア文学の枠を越えて、「現代史と映像」、「文学と映像」といったこれまで外語で手薄だった芸術論の総合講座を開設、学生に新鮮な刺激を与えています。また民族問題の専門家である高橋清治教授は、この5月から文部省の在外研究員としてモスクワ、グルジアに10ヶ月の予定で出張中です。民族紛争に絡んだ爆弾テロが頻発しているモスクワですが、無事に研究活動を終え、帰国されるのを祈ります。残ったスタッフは、移転と独立行政法人化の波の中で日夜会議に明け暮れていますが、先輩諸兄が築かれた外語の良き伝統は守るつもりですのでご安心の程。

語のアイデンティティはとうかがわれることになるでしょう。私自身、「東京外国語大学の副編集長として、この数年間その編纂に携わって来たものとして、外語がいま大きな岐路に立たされていることを痛感します。時流に流されることなく、外語の独自性を大切にす道を真剣に模索するつもりですので、先輩諸兄の忌憚のないアドバイスを期待いたします。

最後にになりましたが、悲しい計報をお伝えしなければなりません。再興なったロシア会の初代の学生幹事を担当していた藤村岳志君が、急性白血病のため急逝されました。クラスノヤルスクに単身留学、ロシア語に意欲を燃やしていた矢先の出来事なので、残念でなりません。

とここでこれまででは考えられなかったことですが、多摩五大学(外語、一橋、学芸、電通、農工)の単位互換制がすでに発足し、卒業必要単位の半分は他大学の授業で充当出来るという制度が動きだしています。これを利用してとこれまで手薄だった社会科学系の授業は一橋という学生が多くなり、各種国家試験の合格率も高まるものと期待されます。と同時にその時外

魅惑的なラテンダンスを披露してくれた、原口、宮田の両君は、その後全日本チャンピオンとなり、目下原口君はロンドンにダンス留学を、宮田君はダンス学校の教師としてプロに転向したことを報告しておきます。

一昨年のロシア会の席で、松田奈穂子、日ソ貿易横内学、豊美、佐保直子、山田 悟、日本放送協会、矢崎与和、ヨドバシカメラ、麻田万奈、IT'Sジャパン、藤田 愛、東京外国語大学大学院博士前期課程、福岡由仁郎、東京外国語大学大学院博士前期課程、堀澤慶子、東京外国語大学大学院博士前期課程、石井将勝、時事通信社、岩崎理恵、東京外国語大学大

は、西ヶ原キャンパスのすぐとなりの染井霊園にあります。外語に着任以来、私は新入生をそこに案内し、明治時代の外語露語科の知的雰囲気を知ってもらうことよって、学生諸君に外語で学ぶことの気概を持って欲しいと念じています。ところが数年前まであった二葉亭の墓の道標が腐って撤去されたのか、今はありません。そこで提案ですが、外語の移転を機にこの道標をロシア会の名で霊園に寄贈したいと思うのですが、いかがでしょうか? 総会に提案して承認されれば、あとは事務局で都と交渉いたします。(昭44卒・東京外国語大学教授)

新キャンパス移転

本学は来年の8月に府中の旧閑東村の新キャンパスに移転します。閑東村といっても若い人々には分からないでしょうが、調布飛行場の隣、多磨墓地と野川公園、それに国際基督教大学と隣接した米軍キャンプ跡で緑の多いところでは、この移転に関する最新情報は「外語会報」に詳し

また前出の亀山郁夫教授が「破滅のマヤコフスキー」(筑摩書房)で、ソロキンの「ロマン」を訳出した北大の望月

二葉亭の墓の道標を

一九九九(平成十一年)三月 卒業生氏名と進路

ロシア・東欧語学科ロシア語

横内学 豊美
松田奈穂子 日ソ貿易
佐保直子
山田 悟 日本放送協会
矢崎与和 ヨドバシカメラ
麻田万奈 IT'Sジャパン
藤田 愛 東京外国語大学大学院博士前期課程
福岡由仁郎 東京外国語大学大学院博士前期課程
堀澤慶子 東京外国語大学大学院博士前期課程
石井将勝 時事通信社
岩崎理恵 東京外国語大学大

北出大介	学院博士前期課程 東京大学大学院人 文社会学系研究科	菅島 亘	東京外国語大学大 学院博士前期課程
熊倉由華	丸紅	浜中由樹子	
栗山美香	蝶理	原田富美子	日ノ貿易
前川 恵		橋本 徹	トヨタ自動車
真川 民		平沢 淳	新潟県庁
宮子和美	翻訳センター	五十嵐香奈	ぎょうせい
宮本廣太郎	日本ビクター	井上浩子	日本商工会議所
中庭祥代	ナウカ	伊藤みのり	国際厚生事業団
仁平香理	中川特殊鋼	柿崎香苗	新潟市役所
仁平加奈子	NTTデータ通 信	金丸愛音	日本生命
大森雅子	東京外国語大学大 学院博士前期課程	加藤昌美	
齊藤美保		勝目博之	南日本新聞社
佐々木沢治	三井物産	河上智子	国際ビジネスコミ ュニケーション協会
塩田賢一	横浜市役所	小師尚子	
杉澤潤香		箕浦久美子	東京外国語大学
竹浦広紀		三輪貴生	大学院博士前期課程
宇田川有希	NTTデータク オリティ	宮原 裕	ICT
和田泰宏	オフィスクレッシ ェンド	村松 壮	東京外国語大学大 学院博士前期課程
矢木篤志	石川島播磨重工業	野田花絵	フジクラ
矢野広宣	杉澤商会	有馬優子	横河電機
吉次和枝	早稲田大学大学院	斉藤恭央	中央信託銀行
ロシア・東欧課程ロシア 語専攻		佐々木えみ	北海道放送
阿出川修嘉	東京外国語大学	澤田美帆	北海道立高等学校
大学院博士前期課程		関口 舞	教諭
安楽美友紀	エアニッポン	清水あず深	小平市役所
朝妻恵理子	一橋大学大学院	清水健也	スタジオ・イース ター
藤川明子	東京外国語大学大 学院博士前期課程	榎地孝徳	
福興知久	日本アイビーエム	篠崎一平	丸紅
船中奈津子		鈴木学美	
舟津奈緒子	日本貿易振興会	田口淳祥	
		高澤理恵	学校法人清真学園

寺田容子 打越美緒 上田保通 梅澤裕希子 インテリジエン トウエイブ 和田竜介 江崎グリコ 渡辺由美 泉貿易 山田 剛 東京特殊電線 山野井佳苗 安井晶子

8頁5段目から続く
「泣いたってどうにもならないんだってさ!」……

終わりに、今回のモスクワ留学に対して多大なる助言や支援をして下さいました外語ロシア語専攻の先生方や先輩・同輩・後輩、ならびにモスクワで大変お世話になりました読売新聞社、フジテレビの両モスクワ支局スタッフの皆さん、日本から私を励まし続けてくれ、心の支えになったヒンディー語専攻の弘中千穂さん、そして何よりも一方的に私の考えを聞き、安否を気遣う羽目になった私の家族にも厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。(ロシア・東欧課程ロシア語専攻四年)

東京外語ロシア会1998年度収支実績

(98.4.1.~99.3.31. 単位 円)

1 収 入	前期繰越金	216,169
	旧ロシア会引継金	661,955
	受取利息	57
	年会費	270,000
	(納入者1931年~98年卒、135名)	
	終身会費	1,650,000
	(納入者1938年~97年卒、55名)	
	寄付金	70,000
	(納入者89年卒、古郡重忠氏)	
	合 計	2,868,181
2 支 出	会報関係	
	振込票印刷	2,300
	ラベル打ち出し	17,000
	郵税	144,749
	会議費	14,912
	印刷発送費	263,508
	振込み手数料	262
	総会後懇親会補助	208,936
	合 計	651,667
3 差引次期繰越金		2,216,514

東京外語ロシア会懇親会収支

1998年11月22日実施(単位 円)

1 収 入	懇親会参加者会費	295,000
	(@5千円×59名、在学生を除く)	
	ロシア会会計より補助	208,936
	(学生約50名分に相当)	
	合 計	503,936
2 支 出	料理代(消費税共、)	
	支払先 西洋フード)	417,312
	飲物代(消費税共、)	
	支払先 沢田商店)	85,785
	振込み手数料(2件)	839
	合 計	503,936

会計から

ロシア会の会費は前回お知らせした通り、年会費二千元又は終身会費三万円となっております。納入頂いた状況は表の通りで、ご支援の程感謝申し上げます。ご覧の通り、九八年度の次期繰越金は約二二〇万円余と一見余裕ありと見えますが、納入頂いたのは会員総数二千名の割にも達しません。幸い九八年度は終身会費の方が相当数に上ったので金額的には良い結果になりました。しかし今後は終身会費の方は減少する一方と思われ、外語百周年に因んでロシア会独自の出版事業等も検討されており、この種の会費納入率は四割五分が通常とされているようです。

その意味では払込みをお忘れになっている方も多いと見られます。どうか是非思い出してお手続き下さい。なお、会費納入は九八年度からとなっておりますので、九九年三月卒以外の方で今回初めて納入の方は二分四千元となります。終身会費納入の場合は三万円と昨年と同額です。以上ロシア会の維持発展のために宜しくご支援の程お願いいたします。

「追伸」 終身会費納入済の方に払込用紙が同封されています。もししたら廃棄して下さい。また、今回払込みされる方は、用紙の通信欄に必ず卒業年次を書いて下さい。

(井上 勝・昭25卒)

終身会費納入者
(卒業年次順・敬称略)

古閑 雪、半井四郎、石橋鐘二、島田秀雄、井上 守、大沢 進、峰岸孝次、渡辺珠雄、井上 勝、古茶兵衛、西尾富巳男、倉田史郎、平野 裕、石川士郎、平 晃、宮内邦子、加藤進英、直川誠藏、今西昌幸、佐藤勝彦、福田和雄、町田裕子、西河 専、峯尾三郎、大村貞子、小宮紀元、高木昌男、中澤孝之、大森 正左近 毅、中尾 至、長井康平、池谷 満、斎藤和夫、川口世津子、尾辻隆明、三浦みどり、泉田満里子、永野隆子、熊沢さとし、中村 裕、奥沢清子、黒川知文、高村聖木、江尻美恵、吉岡ゆき、K・A村田真一、坂井田直美、加藤木貴子、高野 茂、伊藤秀樹、古川稚佳子、古郡重忠、戸部浩美、平木陽子

間違えた概念で受け入れられたことも割り引いてあげなければならぬ。市場経済の根幹をなす人と人の信頼関係、企業と企業の信用の重要性が無視され、金儲けのためなら自分以外の人間はすべて敵で、騙すのが資本主義の常識として受け入れられたことは悲しい事実である。それらの典型は汚職政治家であり、ビジネスの相手や自分の企業さえも騙し私腹を肥やすノーズ・ルースキーであり、金儲けや細張り維持するには殺人をいとも簡単に犯すマフィアである。幸せをもたらす筈であった、自由と民主主義は一握りの悪徳家に繁栄をもたらすだけのものであり、辛抱強いお人好しのロシア人たちはまたしても苦難の道を進まされていく。ロシア人は70年間の大きな実験から解放されたと思っただら、これに次ぐ新たな人類実験の被験者にさせられていくのではなからうか。人には自己防衛本能があり、環境によって大きく姿勢を変えながら生き延びようとする。社会主義時代、ロシア人にとって防衛するために結束することが生き延びるすべであったが、新しい体制のもとでは、結束は共倒れを意味し、自分個人の発展と生き残りの機会を捨てることを意味する。「あな

たたちは、昔の優しさや人懐こさはどこに忘れてきたのか」と尋ねると、ほとんどのロシア人は一瞬辛そうな顔をする。そして肩を縮める。そうした表情や仕種を見ると彼らは決して心の優しさを失っていないということが分かって安心する。

おわりに

久しぶりに日本の生活に戻ってみると、自分が浦島太郎になつていたことに気がついた。6年前にモスクワに出掛ける前と日本は何かが違う。若い世代の変わりようである。風俗やファッションは時とともに変わっていきから、多少驚いても自分に言い聞かせれば呑み込める。問題は傍若無人に振る舞う若者の姿だ。こんな短期間に人間が変われるものだろうか。日本人の変わり方を見ればロシア人の変わり方はまだ可愛いような気もしてきた。

今般、ダイヤモンド社より、拙著「ロシアはいま」が出版されました。ロシアについてはどこにスポットを当てるかによっていろいろ面白い点がありますが、この本ではごく一般的なおロシアの現状をややビジネスに焦点を当てながら書いてみました。ご批判を頂くことができれば幸いです。

(昭43卒・丸紅株式会社 機械第二部門部長)

KGB崩壊の熱い夜と

サハロフ博士 斎藤 勉

毎年、八月になると、あの日々熱く長い夜々の記憶が昨夜のことにように甦る。それは、ソ連崩壊をはさみ五年三か月に及んだ私のモスクワ特派員生活の激動を凝縮したような狂おしい夜だった。一九九一年八月二十二日。「国家の中心の国家」といわれ、ソ連国民を七十余年もの間、苛み続け てきた国家保安委員会(KGB)が文字通り、音を立てて瓦解した一夜である。

民主化運動のピークを成す一大ドラマだったが、その舞台に花を添えるべき主役々の姿はなかった。国民的精神的支柱となつて全体主義体制と闘い続けたアンドレイ・サハロフ博士。ベルリンの壁崩壊を見届けてわずか約一か月後の八九年冬の酷寒の夜、博士は六十八歳で卒然とこの世を去つた。冷戦終結十周年という今年には、サハロフ博士の死去十周年にも当たる。その感慨が、私の胸の中で八年前のKGB陥落の夜の感動を今夏は一段と増幅させた。

ソ連共産党の情報源から「KGB本部のある」ジェルジンスキー広場が騒がしい」と電話があったのは、八月二十二日の午後四時ごろだった。

アメリカ大使館から強力なクレーン車を調達してきて、日付が変わろうとする深夜になつてやつと、ジェルジンスキー像は高々と吊り上げられ、大きなトラックの荷台に横たえられた。若者たちがどつとそ の荷台に飛び乗って銅像を蹴り上げ、ツバを吐きかけた。撤去作業は終わった。その瞬間、ドーンという地鳴りのような大歓声と大拍手がわき上つた。私も無意識的に、回りのロシア人たちと手を取り合い、肩を組み合つていた。歴史が目の前で踊つていた。

カメラ片手に押つ取り刀で現場にかけつけると、すでに満杯の市民で空気がほどよい。共産主義に対する国民の憎悪の象徴だった秘密警察の創始者、ジェルジンスキー像を取つ払つてしまおうというのだ。のちにモスクワ市長になるポポフやロシア国務長官になるブルプリス、そしてスタンケービッチといった改革派のリーダーたちが歓声と怒号の中で陣頭指揮をとつていた。クレーン車をやつけた直後の「それいけい」という民衆の熱気が充満していた。「恐怖」の代名詞だった広場は「解放区」と化した。

撤去作業の興奮の中で壮大なスペクタクルを見るように、モスクワの夜空には何発もの火花が打ち上げられた。粉れもなく、私がかれこれ五十年間の人生で見た最も美しい花火だった。それは新生ロシアの到来を世界に告げる狼煙のようにも映つた。普段の夜はボツ、ボツと不気味な明かりを灯していったKGB本部ビルは、この晩に限つて一点の光もなく、職員が真っ暗な建物のあちこちでカーテンに隠れるように、恐る恐る窓外のドラマを見守つていたので印象的だった。

開幕から終幕まで、私は八時間にも及んだこのドラマの一部始終を目撃した。それこそ生理的要求も忘れ、「民衆がKGB解体を開始」という朝刊最終版に叩き込むべき原稿も東京の外信部に委せて、「この現場は絶対離れまい」と腹をくくつた。ベルリンの壁崩壊劇にも匹敵する二十世紀の歴史的現場を見損なつたらモスクワ特派員になつた意味がない、と思つた。ドラマの途中、何度も熱いものが込み上げ、霞むファインダー越しに夢中でシャッターを切り続けた。二十三日未明になつて支局に戻つた私は、この感動を思う存分、夕刊用原稿にぶつけた。

KGB陥落劇の直前、ゴルバチョフ・ソ連大統領を一時失脚させた守旧派(左翼強硬派)によるクレーン車が失敗エリツイン氏を旗頭とする民主化のエネルギイは怒涛となつてKGB本部に襲いかかったのだ。その二日後、返す刀で今度はソ連共産党が解体され、年末にはソ連自体が消滅する。

KGBと共産党が相次いで壊滅した数日後の真夏の昼下は、私はモスクワ南郊、森深いボストリヤコフスコエ墓地に眠るサハロフ博士の墓にいた。その日の朝、改めてKGB本部の前に立つたとき、主の消えたジェルジンスキー像の台座が共産主義の墓標に見えてきた。そのとき、ふと、亡きサハロフ博士に会いたいと思つた。ジェルジンスキー

像撤去劇の途中も、「博士が生きてこの現場にいたら」という思いが何度か、頭をよぎっていた。全体主義との孤高の闘いで国民の敬愛を一身に集め、ノベル平和賞に輝きながら、「共産党打倒」の夢の実現を見ずに逝った博士に、私なりに博士の大願成就を墓前に報告したくなったのだ。生前、民主化要求のデモや集会でいつも気楽に雑談取材に応じていただいた恩もあった。

私は、ソ連共産主義体制の崩壊は、国内的にはエリツィン氏とサハロフ博士が民主化運動の車の両輪となったからこそ実現したとみている。サハロフ博士が常に決死の覚悟で反体制運動の先頭に立ったことが国民を大動員できた重要な要因だったと思う。

博士の墓碑銘さえない質素な墓前に、途中で摘んできた野の花を手向けたとき、葬儀の日の感動的な情景が浮かんできた。

博士の葬儀は八九年十二月十七日、モスクワの「青年宮殿」でしめやかに営まれた。朝からみぞれと雪まじりの天気で、底冷えのする厳しい寒さだった。私は原稿の締め切り時間もあるて昼間の弔問の様子まで取材していったん支局へ引き上げた。ところが、たまたまその晩、青年宮殿近

くのレストランで遅い夕食をとって帰宅途中、念のために宮殿わきを通ってみると、なんと、シンシンと雪が降り続ける中で黙々と弔問の順番を待つ一般市民の長い長い行列が続いていた。私は帰るに帰れなくなり、その行列に沿って何回か車をゆっくり走らせながら、マフラーで顔を温める弔問の重んじ人にインスピュエーしたりした。結局、この弔問は日付が変わった未明まで延々と続いた。博士への国民の深い敬愛の情、そして共産主義権力への無言の抵抗が手に取るように痛感できたシーンだった。ロシアの民衆のこの忍耐強い、内に秘めたパワーが結局はソ連を倒した原動力のような気がする。

サハロフ博士で意外に知られていないエピソードがある。実は死の前まで、全文四十六条から成る「新生ソ連憲法草案」の執筆に没頭していたのだ。歴代ソ連政権と闘いながら、一方でソ連崩壊後の新しい「国のかたち」をも模索していた。新国名を「ソビエト欧州・アジア共和国連邦」と命名したこのサハロフ憲法草案には、こんな理念がうたわれていた。「社会主義と資本主義の多元的収斂をめざし、人類が生き残るというグローバルな目標が、いかなる地域、民族、階級、党、グ

ループ、個人の目標にも優先する」。

サハロフ博士の政治活動の遺志はエレナ・ボンネル夫人(七六)が受け継ぎ、今も旧ソ連各国の人権抑圧の実態などを告発し続けている。そのボンネル夫人が病氣治療と夏休みを兼ねて滞在中の米国に今夏、憲法のその後をきくために電話を入れてみた。モスクワ特派員時代、産経新聞への寄稿などでお世話になった懐かしい声が飛び込んできた。「あれ(サハロフ憲法)は実に民主的でユニークな内容でした。しかし、所詮はソ連のために作ったもの。ロシアの政治・経済状況はこの十年悪化するばかりで、あの憲法は今の事情にはそぐわない。という(大統領権限が強大もつといけません。もし今、アンドレイが生きていたら、斬新なロシア憲法起草していただろうに……)」。

冷戦終結十年。そして、サハロフ博士死去十年。私流にこの十年を総括すれば、「サハロフ的なるもの」が世界的に風化していく過程だったように思う。今の世界には、サハロフ博士のように、国民にこそつて尊敬され、国難の中で個人の利益を超え自ら憲法草案を作ってまで国民に「国のかたち」を示せるような情熱と気骨、見識を備えた指導者も政治家も見当たらない。この体たらくぶりが、「私」に溺れ「公」をないがしろにする風潮を各国に蔓延させている、と私は考える。

博士が生きていたら、ボンネル夫人が言う「新ロシア憲法」で混迷続く祖国にどんな「国のかたち」を示していただろうか。

サハロフ博士の墓には今なお、市民からの献花が絶えることがないという。(昭47卒・産経新聞編集局次長兼外信部長)

日口青年交流

田村 雄

私はこの夏、毎年ロシアの学生と交流を続けている学生団体の委員長としてロシアに赴いた。この団体は今年で11年目を迎えた。一年ごとに関催地を日本と極東ロシアに変え、学生のみで交流の場を作り上げていくのだが、これまでの参加者はもう百数十人を数えるまでとなっている。今年にはロシア開催の年にあたり極東の二大都市、ハバロフスクとウラジオストクで会議は開催された。極東と言うと、特に東京でロシア語を学ぶ者にとつては極めて馴染みの薄

い地という印象を受けるが、新潟や富山などと姉妹都市間係を結び飛行機ならば僅か二時間足らずで行き来できる、日本にとつては本場に近いロシアなのである。実際に街には日本の車が当たり前のように走り、アジア系の顔を人込みから探しだすのも難しくない。まさに、現在でもロシアとアジアが交じり合う接点の地ということを実感する。

私はこの夏の三週間を、そんな地に住む学生約25名と共同で過ごした。中には昨年の夏、動した仲間も半数程参加した。交流と一言で言っても、それは大変奥深いものであるし、その人によって色々な意味の多岐にわたる。またその他に、方法も様々である。私達の目指す交流には大きく二つの目的がある。まず一つが、実際に互いの国に行き、自らの目で状況を見つめ、自らの肌で生活を体験することによって、本や報道からくるのではない自分自身の感覚で互いの国をとらえ直すということである。

しかし、ただ互いに知り合うことだけが交流なのか？私はこの夏を終え、この会議が持つもう一つの偉大な意味を知ったのである。それは、ロシア人と真に一人の「人間同士」の関係を築くことである。これこそ、交流の最も難しく

も楽しいことなのだろう。私にとつて今回の会議は決して楽しむことだけで終わってわけではなかった。行事というものにハブニングや問題というものは、実は、今回の会期中にも幾つもハブニングは起きた。役割から、その度にロシア側のメンバーと話し合う。当然の事ながら、一緒に問題を解決するのも、頼れるのも彼らロシア人メンバーである。どうしても向こうの本音も見えてくるし、こちらもそれを言わざるを得なくなる。だが、彼らは難しい中でも問題解決に全力を尽くしてくる。本当に共に一つの一

生忘れられまい。特に向こうの委員長のスラヴァとアーニヤには「友人」以上のものを感じる。それは一年間、会議開催の為にお金を集めたり、プログラムの調整をしたり、メンバーをまとめたりと、同じ苦勞を積み重ね、同じような悩みを乗り越えた者同士の、同じ一つのものを作り上げたというところからくるものなのだろう。また不思議なことに、ロシア人達の一人一人の個性

や、人間関係がよりくつきり見えてきたのもその頃だった。その時、「あー、彼らとの友情は本物になったんだな」と初めて感じられたのだ。この体験は、そして友情は私にとって一生の宝となるに違いない。



野外でのミーティング

お互いを完全に理解し合うのは、本当に難しい。私は、その溝を埋めるのは、互いに理解し合いたい、寄り添いたいという切なる思いしかないと感じる。そこから、彼らの本当の生活の厳しさややるせなさを理解することもできるだろう。私は、日本でロシアを学ぶ私達若い学生にこの意識を常に持つてロシアと付き合っ

一九九七年十一月十日。陰鬱な空、煙草の煙、ガソリンのにおいでその街は私を出迎えた。今まで一度も異国に足を踏み入れたこともなかった。飛行機すら国内でも乗ったことがない。そんな者がいきなり現地時間16時にすでに闇と化した気温零下の空港で、怪しげな白タクの兄ちゃん集団に前方を阻まれながらも40キロの荷物を引きずり脱出するというきつい洗礼を受けたのだ。最初からこの留学

現在の日口関係を語る時、草の根交流、民間交流の重要性が必ず謳われる。それは紛れもなく「人と人」との交流以外の何物でもない。約二年間半のこの活動を終え、その重要性を改めて感じる。まさに、現在の日口間に足りないのは、人間同士のつながり、つまり「人と人」の心の融合なのだ。確かに現状を考えれば、ロシアの人々と接する機会、ましてや彼らと同じ立場で協力したい、何か一つのものを作り上げるといふ場を見つめるのは、至極難しいことだろう。またそこで両者が

それには今、やはりもっともつと両国の人間が触れ合い、我々は彼らと同じ苦勞をすることが必要だと思う。そういう場として、私達のような地道な活動を続ける団体が存続し、日口の架け橋となつてくれることを心から願うし、両国の若い世代の学生が、自分たちの手で何か一つのものを作り上げる経験を少しでも多く積んで欲しい。またそういうチャンスが増えてくれることを切に願う。若さとは無限の可能性と力を秘めている。これも、この活動を通じて私が学んだ一つのことだ。(ロシア・東欧課程ロシア語専攻三年)

岸本正寿

モスクワは涙を信じない

どうまくいくことなんてないと思っていた。なぜなら留学試験の最終選抜の結果が試験後3ヶ月経っても日本政府に何の連絡もなかったからである。日本の文部省の役人には、ただ待つのみだ、とは言われていたが……。私になぜ国費留学を選んだかという、第一には奨学金が出るからだ(なんと月額12ドルのお小遣い。安すぎる)、それ以上に国家による現地での生活、身分の保障が期待されたからだ。でもこんな様子ではたかが知れている。

さて、大学が政府の迎える人は来ているだろうか。何しろフライトが2時間も遅れてしまったから待つていてくれませんか。不安だった。「Advance student」だけ書かれたネームカードがあった。胡散臭かったがこの人かなと思いつつ声をかけた。「遅い、早く車に乗り」と怒鳴られた。大学が依頼しそうな送迎係にはどうしても見えなかった。「依頼状を見せてくれますか?」と頼んだら見せてくれたが機嫌を悪くされた。確かに彼の身分証には大学職員(それもフランス語の講師)と書かれていたが、たかまじい彼の腕に立派な彫り物(彫り物としてあれば疑いなくなるのも不思議ではない……)しきりに日本製だと自慢していたおんほ

